

光沢が保たれた。これはヨウ素により、ヨウ化銀が生成され、また Au は溶解したためと推察される。Pd の含有により、ヨウ素からの影響は小さくすることができるかと推察される。

13) 一平成26年度 慶熙大学国際交流報告一

○松葉 雅俊¹, 佐藤 知哉¹, 吉武 宜明¹, 鎌田 聡仁¹
酒井祐佳子¹, 高木聖四郎², 箱崎 竜治², 山崎 信也³
齋藤 高弘⁴, 大野 敬⁴

(奥羽大学・歯・第5学年¹, 奥羽大学・歯・第4学年²,
奥羽大学・歯・口腔外科³, 奥羽大学・歯・口腔衛生⁴)

本年8月3～10日の日程で国際交流委員長 山崎信也教授引率の元、4年生2名、5年生5名、計7名で行った慶熙大学での国際交流についての報告を行った。

今回の国際交流では慶熙大学附属病院での見学と講義、インプラント製造工場見学および河東病院での研修を行った。臨床研修の他、キャンパスツアーをはじめ食事会や市内観光で両国学生間の交流を行った。慶熙大学付属病院と河東病院では各診療科の臨床研修と講義を受けた。学生同士で光学印象と光学式齶蝕検知器の相互実習を行った。インプラント製造工場ではインプラント体の製造過程のほか、3Dプリンタを使用した治療用器具の開発現場の見学と人工骨(オステオンII)の臨床応用についての特別講義を受けた。臨床研修以外では慶熙大学の学生によるキャンパスツアーや市内観光を通じて韓国の文化を知ることができた。

国際交流を通じて学んだことをまとめる。

1つは英語の重要性である。韓国では海外から治療を受けにくる人が多く、そのときの会話は英語が中心である。先生方はもちろんのこと慶熙大学の学生は英語が堪能であった。我々も臨床の場で、海外の患者と接する機会が出てくると思われる。そのため英語は重要である。

2つ目は最先端技術の臨床応用と東洋医学の応用である。3Dプリンタを使った治療用器具の臨床応用がすでに始められている。その一方で針治療や生薬などの東洋医学も取り入れており医療の幅が広い。

3つ目は積極的な姿勢である。研修に同行していた慶熙大学の学生から日本での治療法や使っ

ている歯科材料など数多くの質問があった。彼らは歯科医療に対する姿勢がとても積極的で我々も見習うべき点だと感じた。

日本国内においても他大学へ行って勉強する機会は減多になく、我々にとって貴重かつ有意義な体験となった。今後の勉学においては国際交流の経験を活かしていく所存である。

14) 前歯の不良なガイドが原因で臼歯部の慢性歯周炎が増悪した症例に対する全顎的歯周治療

○羽鳥 智也, 山本 雄介, 川西 章
森 慎一郎, 高橋 慶壮
(奥羽大・歯・歯科保存)

【緒言】不良なアンテリアガイドは臼歯部への咬合性外傷を増悪させる因子になる。臼歯部の歯周組織破壊が進行した慢性歯周炎患者に対し、犬歯誘導を回復し、全顎的な歯周治療を行った症例の詳細を報告する。

【症例概要】

患者：62歳の男性 初診日：2009年3月11日、歯周病の治療を希望し来院、診査の結果、下顎左側臼歯部の歯列不正、上下顎前歯部の咬耗を認めた。全顎的に歯肉の発赤・腫脹は顕著ではないが臼歯部に限局した深い歯周ポケットが認められた。

診断：局所的な歯周組織破壊を伴う中等度慢性歯周炎

治療方針：1) 患者教育 2) 歯周基本治療(犬歯誘導の回復と咬合力の制御) 3) 再評価 4) 歯周外科治療 5) 再評価 6) SPT

治療経過：歯周基本治療による炎症のコントロールに加えて犬歯尖頭にレジンを追加して犬歯誘導を回復した。歯周基本治療後に再評価を行い上顎左側・下顎両側臼歯部にエムドゲインRを用いた歯周組織再生療法ならびに下顎両側臼歯部に遊離歯肉移植術を実施した。現在は病状も安定し2ヵ月に1回のSPTを継続している。

【考察】本症例では不良なプラークコントロールに加えて犬歯の咬耗によって犬歯誘導からグループファンクションに移行したことで臼歯部の歯周炎が増悪したと考えられた。犬歯の歯周組織破壊は見られなかったため、犬歯の咬耗部にコン